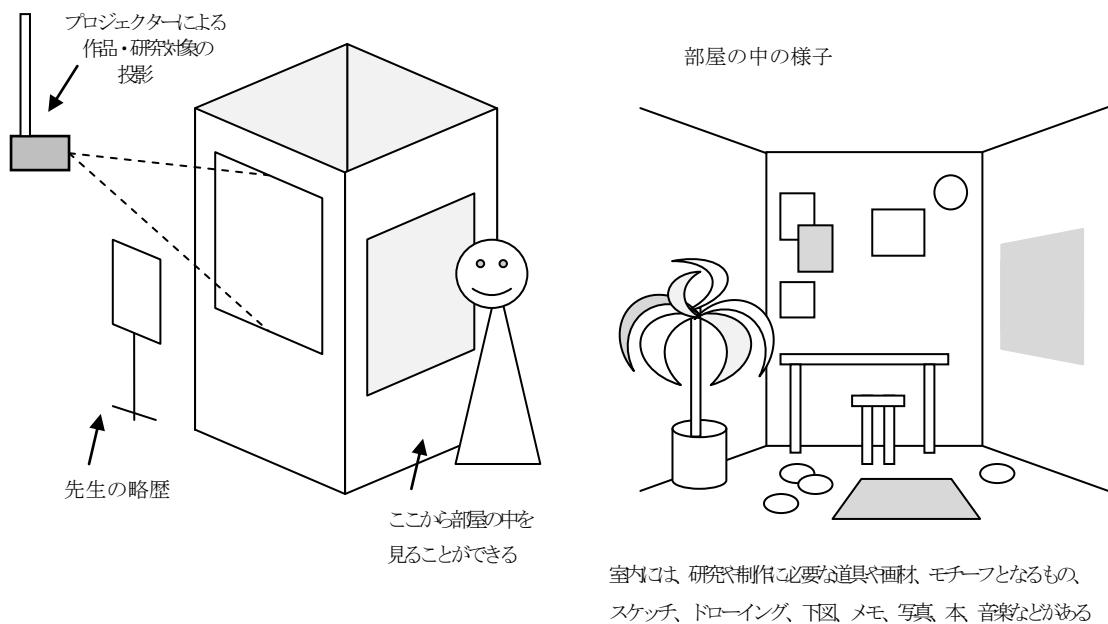


## 展示概要

東北芸術工科大学・7階ギャラリーに、いくつもの部屋(小屋)が形成されている。その部屋の外側壁面には、部屋の主である東北芸術工科大学の教員の作品や研究の対象としているものがプロジェクターで投影されている。投影されている壁の裏側にあたる部屋の中を覗くと、作品制作や研究のきっかけとなるバックグラウンドの世界が広がっている。部屋の中には、教員が普段の研究や作品制作で使用している画材や道具、材料、モチーフとなるもの、スケッチ、ドローイング、下図、メモ、写真などの他に、本、音楽など、様々なものがある。

鑑賞者は、部屋に置かれてあるものから、先生の思考や趣味をうかがうことができ、その空間にある色彩や形から、先生のアイデンティティを感じ取ることができる。先生たちは、普段どんな部屋で研究を行い、作品を制作しているのだろうか。先生の部屋におじゃまして、先生の新たな一面を発見してみよう。

## 展示部屋(小屋)図





三瀬夏之介  
Mise Natsunosuke  
芸術学部美術科日本画コース

#### <略歴>

- 1973年 奈良県に生まれる  
1999年 京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻修了  
2007-08年 五島記念文化財団研究員としてイタリア、フィレンツェにて研修  
2008年 東北芸術工科大学特別講師  
2009年 東北芸術工科大学芸術学部美術科日本画コース准教授

#### <主な活動歴>

- 1997年 京都市立芸術大学卒業制作展 山口賞  
2002年 トリエンナーレ豊橋 星野眞吾賞  
2006年 五島記念文化財団 美術新人賞  
2007年 日本画滅亡論（中京大学Cスクエア/名古屋）  
2009年 第16回V O C A賞  
肘折の灯（山形/肘折温泉）

三瀬は作品を制作していく過程で、大きな和紙に墨を用いて滲みやぼけなどの様々な模様をつけていき、その和紙を破ることによって出来た様々な断片を大きな画面に重ね合わせていくことによって、大きな作品を完成させていく。三瀬が表現するものは、自身の存在を超えたところで存在している大きな周囲の環境や空間であり、それは制作過程においても伺い知ることができる。多様な和紙と墨の組み合わせや、湿度や温度の違いによって滲んだ模様の形は無限に存在し、和紙を破っていくことによってできた断片も三瀬の意図とは離れたところで出来上がってしていく。さらに、何を描くかという答えを用意せずに、手に取った和紙の断片に導かれるままそれらを組み合わせていくことにより、作品を完成させる。制作過程の中で生じた三瀬自身の存在を超えたそれらの存在は、三瀬というフィルターを通じ周りの大きな空間の景色に還元され、一つの作品として姿を現していくのである。

#### <部屋の見どころ>

三瀬の部屋には制作に使っている道具類の他に、首に奈良とプリントされた鹿のビニール製の風船や、賽銭箱のついた神棚、煙管や名前の入ったマグカップ等が置いてあり、そのような日常的な品々からは画家としてではない、三瀬個人の姿を垣間見ることができる。



《J》

2008 年

和紙、墨、胡粉、金属粉、アルミ箔、  
アクリル、印刷物コラージュ等

182×242 cm



《僕の神様》

2007 年

和紙、墨、胡粉

299×483 cm

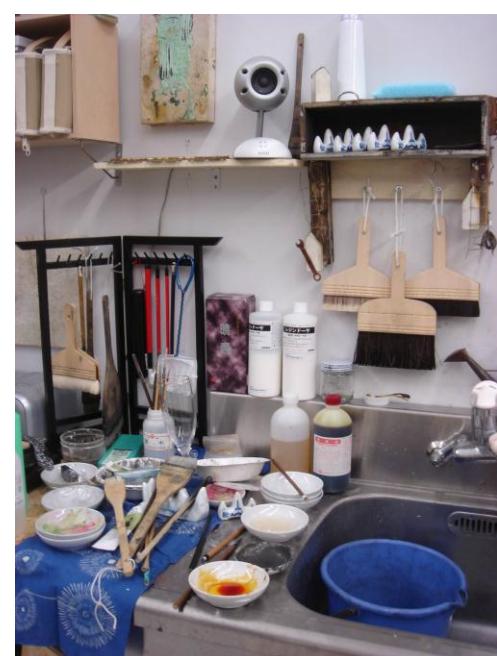


《君主論 II Principe》

2007 年

和紙、墨、胡粉、染料、コラージュ

245×737 cm





志村直愛

Shimura Naoyosi

デザイン工学部建築・環境デザイン学科

#### <略歴>

1962 年 鎌倉市生まれ

1986 年 東京芸術大学大学院美術研究科修了

2006 年 東北芸術工科大学デザイン工学部建築・環境デザイン学科准教授

#### <主な活動歴>

建築散歩 24 コース東京横浜近代編、東京建築散歩 24 コース（山川出版社）

歴史を伝える近代のたてもの（台東区近代建築調査報告書）

米沢出身の建築巨人伊東忠太の世界（山形新聞連載記事 64 編）[平成 17 年度米沢市芸術文化協会特別賞受賞]

TBS テレビ「東京ウォーキングマップ」に散歩師として出演

志村直愛の部屋には、様々な「記録」がおさめられている。大学時代に集めた、世界各地、全国各地の建築物の写真のファイルが、棚にびっしりと入っている。写真はすべて、志村が自分の足で歩き、カメラにおさめたものだ。また、「旅の手帳」と題された手帳には、志村が出かけた各地の電車の切符や、レシート、お菓子の包み紙、割り箸の袋、スキーのリフト券など、様々なものが貼り付けられている。旅の手帳は 150 冊もあるそうだ。写真のファイルと旅の手帳に共通して言えることは、志村の自身の足で情報を集める持久力のすごさと、集めた沢山の情報を整理する持久力のすごさだ。志村は、「大事なことは、集めてから整理をするかどうかだ。」と言う。整理されているからこそ記録は資料として使える。志村は山形新聞で、米沢出身の建築家・建築史家である伊東忠太が関係した建物についての連載を 64 週行った。64 週すべての文章、写真、絵は、志村一人の手でつくられた。この持久力は、写真のファイルや旅の手帳によって培われたものであると言える。自身を記録魔と呼び、文化の記録を大切にし、100 年後のこと、後世のことを考えて今を生きようとする志村の素晴らしい持久力が部屋の随所から感じ取ることができるだろう。

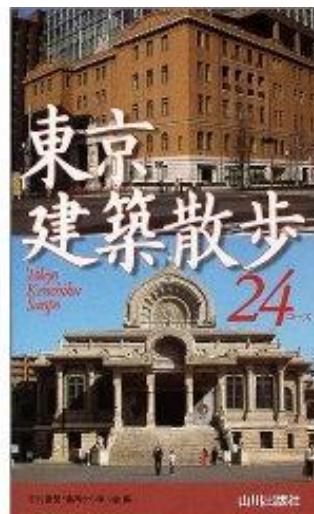
#### <部屋の見どころ>

志村は鉄道好きである。既製品の電車の模型に自分で色を付け足し、細部にまでこだわるほどだ。集めた電車は 7000 両にもなり、並べると博物館のようで、電車の歴史を目で楽しむことができるそうだ。部屋にある電車はほんの一部だが、一つひとつに志村のこだわりが感じられる。また、電車だけでなく手作りの線路にも注目してほしい。



『建築散步 24 コース 東京・横浜近代編』

山川出版社、2001年



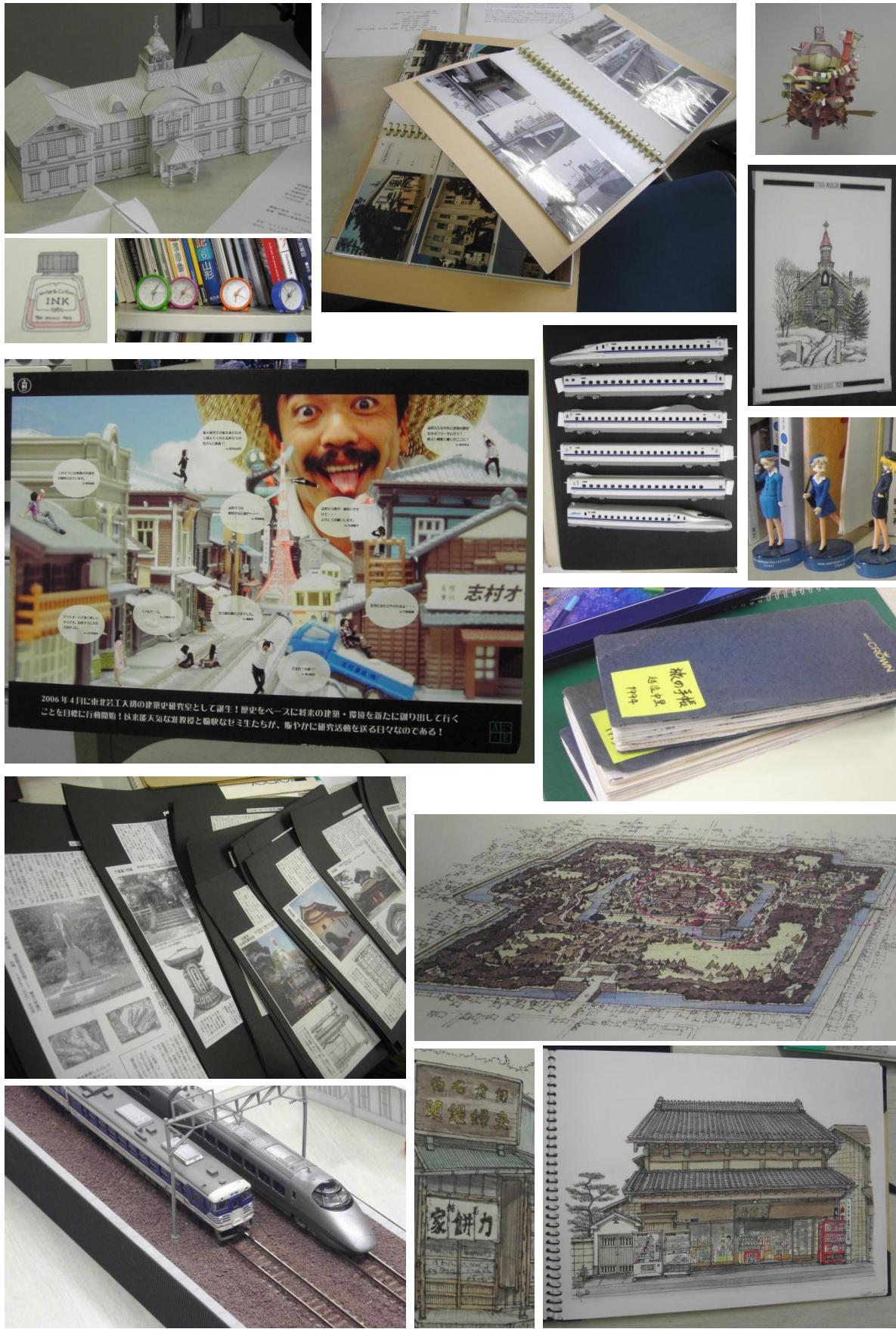
『東京建築散步 24 コース』

山川出版社、2004年



『東京ウォーキングマップ—散歩師 21 人のベストコース 春・夏編』

講談社、2008年





若月公平  
Wakatuki Kohei  
芸術学部美術科版画コース

#### <略歴>

1956年 埼玉県生まれ  
1981年 武蔵野美術大学実技専修科研究課程版画専修 修了  
1983年 同上大学版画研究室助手(-88年)  
2001年 東北芸術工科大学芸術学美術科版画コース教授

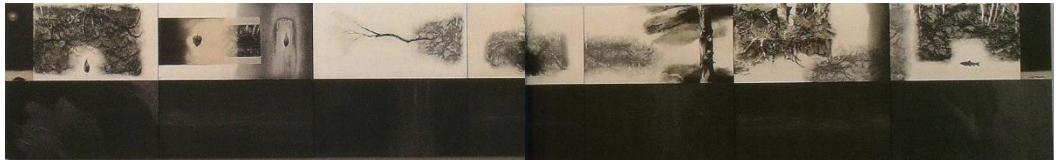
#### <主な活動歴>

1985年「第2回中華民国国際版画展」—金賞—  
1997年「リュブリアナ国際版画ビエンナーレ」—グランプリ—  
2005年「高知版画トリエンナーレ」—奨励賞—  
社団法人 日本版画協会会員、大学版画学会 会員

若月公平は、時間の蓄積を大切にする。それは、彼の作品からとてもよく伝わってくる。若月の作品に描かれている木の幹や木の根は、見ているとどこまでも果てしなく描かれており、見ている自分が木になってしまったような感覚になる。彼は、銅板をルーペで見ながら、細かく削っていき、作品を作る。肉眼では見えない所まで細かく描こうとする仕事は、多くの時間を費やす。この時、若月と描かれるモチーフだけの世界の時間が流れ、若月の意識は、描かれるモチーフと一つになる。それは、胡蝶の夢のようだと若月は言う。小さな銅板の中で制作を行う若月だが、空や飛行機など大きなものに興味を持っている。銅板を削りながら、意識の中で不思議な時を過ごすのは、旅をしていると言い換えることができるかもしれない。銅板の小さな世界と空や飛行機の大きな世界が混在した研究室は、不思議な時間の流れる空間だ。

#### <部屋の見どころ>

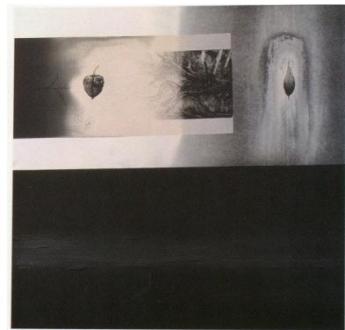
若月は、プラモデルを作ることが好きなのだそうだ。部屋の中には、若月が彩色を施した飛行機が置かれている。プロペラの先端やボディのマークなど、細部にまでこだわって作ったものだ。プラモデルを組み立てるといったクラフト的な作業は、銅板を削り、腐食させ、インクをつけ、紙に刷りとるといった段階を踏んで出来上がる銅版画にも、通じるものがあると若月は言う。窓をのぞいて、小さな飛行機が部屋のどこにあるのか探して、楽しんでほしい。



《双～最上川～2007》 120×840cm



《萌芽》



《羊水》



《雷鳴》



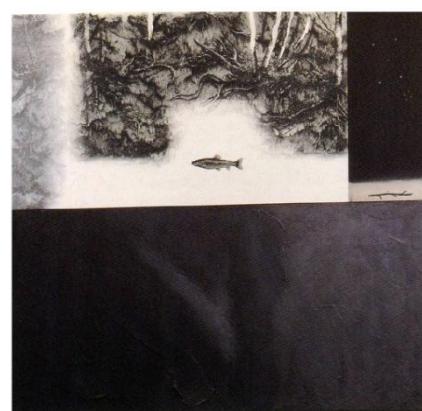
《立脚》



《木靈》



《遠望》



《棲処》





小林伸好  
Kobayashi Nobuyoshi  
芸術学部美術科工芸コース

#### <略歴>

1953年 東京都生まれ  
1979年 東京芸術大学大学院美術研究科工芸専攻（漆芸）修了  
現在 東北芸術工科大学芸術学部美術科工芸コース(漆芸)教授

#### <主な活動歴>

1987年 第26回 日本現代工芸美術展国内巡回展選抜  
1990年 '90TAKAOKA CRAFTS EXHIBITION 金賞  
1991年 国際クラフトフェスティバル準グランプリ  
1993年 国際デザインコンペティション特別賞  
1999年 漆の美 展（なかとみ現代美術館・山梨）  
2000年 漆の美展日本漆工協会会長賞等  
現代工芸美術家協会会員、日本文化財漆協会理事、日本漆工協会理事、漆芸修復研究会会員

小林伸好は、漆かきと言われる、漆を木から採取するところから漆に関わって作品を作る。1本の木から採れる漆は僅かであることを体験して、素材のありがたみ、大切さを実感するのである。また、漆の作品を作るには、沢山の道具と様々な技術が必要になる。小林は、漆を塗る刷毛もヘラも自分で作る。刃物も自分で研ぐ。漆を採取する器もホオの木の皮を剥がして自分で作る。それらの道具を使い、時間をかけて何度も何度も漆を塗り重ねていく。漆は、ガラスにも金属にも塗ることが出来る。様々な素材をうまく扱う技術があってはじめて作品ができるのである。

小林伸好の部屋からは、貴重な漆を大切にする心、自分で作った自分の使いやすい道具への愛着が感じられる。そして作品からは、長年培った高い技術が感じられる。

#### <部屋の見どころ>

小林伸好的部屋には、お茶碗のような器に入った漆が置かれている。小さな器からは、漆の持つ独特なニオイがかすかに感じられる。部屋全体を薄く包みこむようなニオイは、小林の部屋を独特な空間にさせる。そのニオイが、コクのある漆の色を生み出しているのかかもしれない。小林の部屋をのぞくときには、漆のニオイも感じてほしい。



《earth》2009年



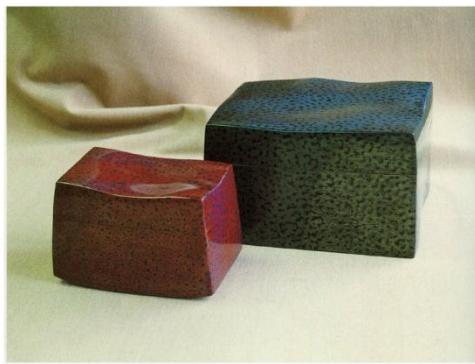
《core》2008年



《俯瞰/風の通り道》  
2004年 漆、麻布(乾漆技法)  
600×900×150mm

《赤い山》  
2004年 漆、麻布(乾漆技法)  
60×120×70mm

《向こう坂一大地の風》  
2004年 漆、麻布、木(木芯乾漆技法)  
850×300×70mm



《Cubic Wave》  
1991年 乾漆、アルミ  
90×143×84 mm



《歪んだ箱》  
1996年 乾漆、変塗  
156×192×115 mm  
910×910×120 mm





谷善徳

Tani Yoshinori

芸術学部美術科日本画コース

#### <略歴>

1986年 石川県生まれ  
1991年 金沢美術工芸大学卒業  
1994年 東北芸術工科大学芸術学美術科日本画コース助手  
1999年 東北芸術工科大学芸術学美術科日本画コース専任講師

#### <主な活動歴>

1990年 国際瀧富士美術賞  
1996年 東京日本画新鋭選抜展（1996、1998、2001）  
1998年 春の院展奨励賞（1998、2005）  
1999年 院展奨励賞（1999、2004、2005、2006、2007）  
個展 1998、2002、2006、2007、2008（オンワードギャラリー日本橋、山形大沼、香林坊大和、仙台三越、ぎゃるり葦など）  
その他グループ展として、旅人会展（銀座松坂屋）、初音会展（大丸心斎橋・東京）など

絵を描く上で大切にしていることは、絵の奥に感じるものです。

人にはそれぞれ性格があり、今まで生きてきた環境も違います。学生たちには、歴史を踏まえ、対象と対峙し、焦らず自分の気持ちの変化に合わせた仕事を見つけてくれたらと思います。

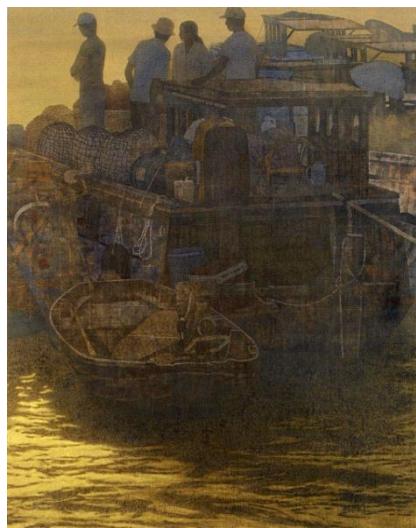
#### <部屋の見どころ>

部屋をのぞいて最初に目に飛び込んでくるのは、色とりどりの絵具の瓶である。日本画の特徴である、様々な粒子と微妙な色合いの岩絵の具や水干絵の具が棚いっぱいに並んでいる。絵の具の瓶たちは、見ているだけでわくわくするほどきれいだ。谷善徳は、絵の具を何層にも重ねて、画面上に複雑な色合いを作りだし、情感豊かな景色を描いている。こうした作品は、スケッチが土台となっている。モノをしっかりと観察して描いたスケッチをもとに、たくさんの絵の具の中からの確な色を選び出して、描いていく。谷善徳が描くことで、ただの絵の具が絵の中では、日の光を反射する水になったり、重厚な石でできた建物になったりする。



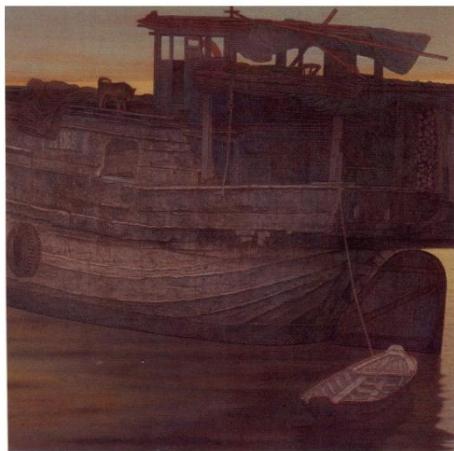
《使者》

2009年 和紙、岩絵の具  
227.3×181.8 cm



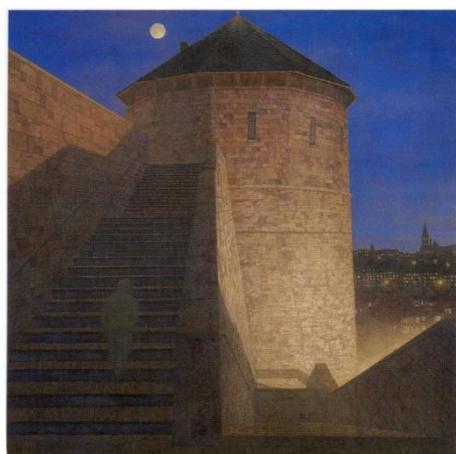
《舫船》

2007年 和紙、岩絵の具  
227.3×181.8 cm



《漾舟(ようしゅう)》

2009年 和紙、岩絵の具  
106×106 cm



《古城の番人》

2008年 和紙、岩絵の具  
106×106 cm



《待春》

2005年  
和紙、岩絵の具





池田正  
Ikeda tadasi  
教職課程 教養教育センター

#### <略歴>

1947年 山形県に生まれる  
山形大学教育学部美術科  
現在 東北芸術工科大学教職課程、教養教育センター教授 こども芸術大学副校長

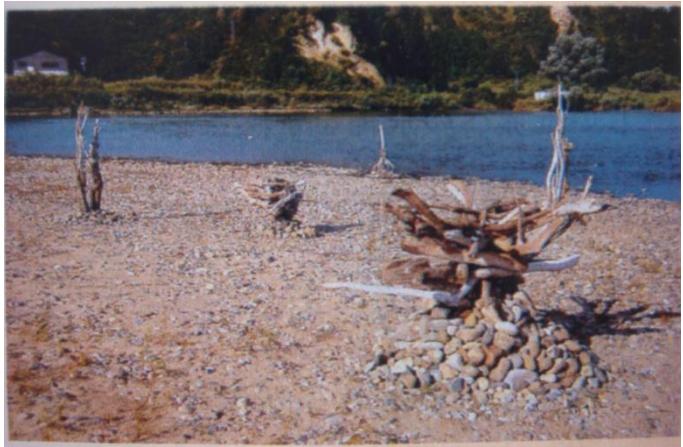
#### <主な活動歴>

1995年 「魅力ある学校を目指して」 「登校拒否 教師は何をするか」明治図書 出版  
2003年 「オブジェ・再生」 国民文化祭（環境芸術の祭典）優秀賞（県知事賞）  
2008年 論文「高校生へのメッセージ：一層の飛躍を願って」 山形県高等学校文化連盟30周年記念誌編 など

彼の土台となっているモノのひとつに、過去の闘病経験がある。病室でとある一人の青年から受けた衝撃は忘れられないものとなっている。「君がうらやましいなあ、僕は生まれつきの病気で、これまで満足に学校に行っていないから友達もいないし、誰も見舞いになんか来てくれない」池田はこの言葉に大きなショックを受けた。担当医からは教師はもとより、美術までも続けることはできないとまで言われ、自暴自棄の一歩手前で踏みとどまっている自分に、そのような言葉をかけてくるとは思いもよらなかったのだろう。長い闘病生活の中で得たものは、美術教育が人間形成の基盤をつくるという実感を持ち続けることに繋がっている。教師として学生の変化を見つめる。入学時と卒業時での学生たちの考えは大きく変化し、「自分のために」から「他者のために」という考えは、この大学を目指しているものであり、その変化に喜びを感じている。池田は学生だけでなく、幼児と母親を対象にした授業を通じ、これまでにない発見と驚き、子どもの持つ可能性に大きな期待を持っている。教師という立場から学生や子どもと関わりを持つ中で得るもの。生活している中で感じているものを彼は表現している。

#### <部屋の見どころ>

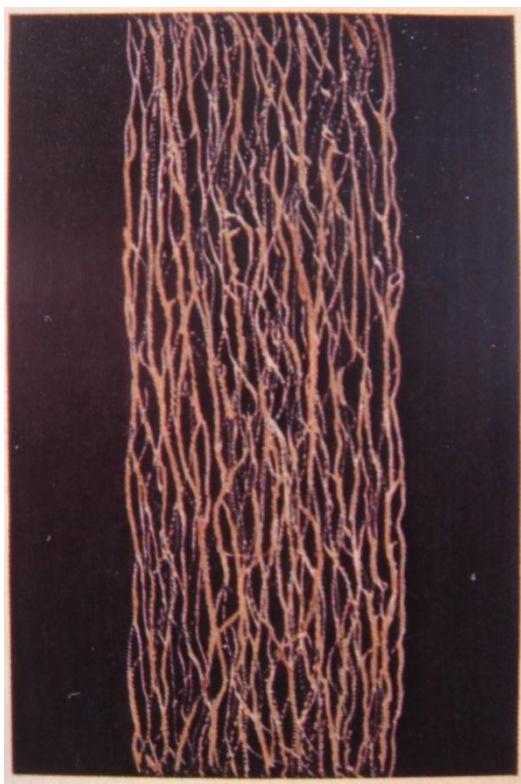
池田の部屋には、多くの自身の作品が置かれている。独特の絵肌を持つ絵画、筆で描いたのではなく、電動ドリルでパネルを掘るという誰も考えられないような絵が置かれている。また、自然の中にあるものが多く存在する。色づいていく桜の葉を写真におさめたものや、流木があり、常に彼の手の届くところに置かれてある。壁には自身の作品や、自然を写した写真が貼られている。



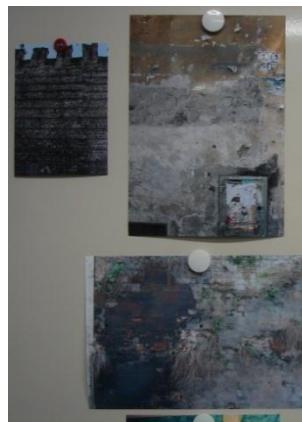
《再生》  
2003年  
オブジェ・流木・石



《おんな・夜》  
2007年 油彩  
F8号



《作品》  
2007年  
電動ドリル 90×60cm





長沢明

Nagasawa Akira

芸術学部美術科日本画コース

#### <略歴>

- 1967年 新潟県生まれ  
1994年 東京芸術大学大学院日本画修了  
2004年 東北芸術工科大学美術科准教授  
2009年 東北芸術工科大学美術科教授

#### <主な活動歴>

- 1994年 第5回柏市文化フォーラム104大賞展-TAMON賞大賞受賞  
1997年 五島記念文化賞美術新人賞受賞、98年まで渡英  
2004年 平成15年度文化庁買上優秀美術作品  
2006年 第3回東山魁夷記念 日経日本画大賞展 ニューオオタニ美術館  
2008年 第16回MOA岡田茂吉賞優秀賞  
2009年 ダイナミズムの源流 HEAVY META II

長沢にとってドローイングとは頭ではなく手で考え、自分の頭にあるものをちゃんと目で確認するという作業だ。自分の頭の中にあるものとは、自分の中で消化したもの。つまり、瞬間的な感情で直感をひねり出すものだけではなく、自分の頭の中にあるもの、自分の中で消化したものを呼び起こし、ちゃんと目に見える形にして、再構成し、それを確認するということだ。そのとき判断の基準にしていることは、リアルであるかだ。そのリアルとは、形がそっくりだとか、緻密に描くということではない。それは、絵画が本来備えていたはずの原始的なものや見えないものや根源性だ。

長沢にとって、なぜトラなのかとか、何のためにとか、これを伝えたいとか等ということは、どうでもよくて意味がないものようだ。それは大人の考えで小賢しいことで、それよりも自分が子供のころに熱中していたことのようなものが本当は大切で、みんなが共感できるものとはそういうものではないのだろうか、と長沢は言う。

#### <部屋の見どころ>

長沢の部屋にある、ペインティングナイフやヘラ、刷毛などの道具には何色か分からない不思議な色の絵の具や鋸がこびり付いている。道具からは、長沢の絵を見たときと同じような力強さが感じられる。窓をのぞけば、どのような道具を使って不思議なトラが生まれているのかが分かるだろう。



《アオキトラ》  
寒冷紗、岩絵具、土  
250×276 cm



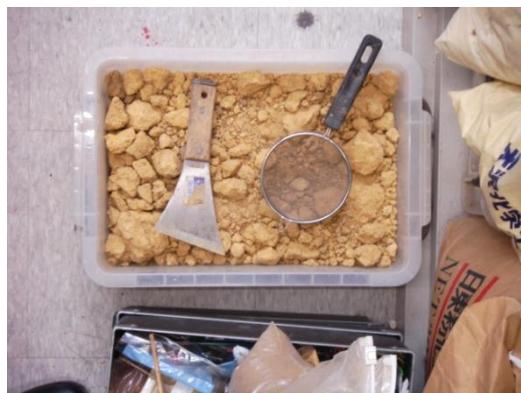
《トブトラ》  
寒冷紗、岩絵具、土  
227,3×456 cm



《トブトラⅡ》  
綿布、土、石膏  
192×200 cm



《チヨートラ》





番場三雄  
Bannba Mitsuo  
芸術学部美術科日本画コース

#### <略歴>

1953年 新潟県に生まれる

院展、龍生会展、旅人会展などに出品。

主な受賞作品に「峠」秋季院展奨励賞、「祈り」「寧児」春の院展奨励賞などがある。

現在 東北芸術工科大学の芸術学部美術科日本画コース准教授

#### <主な活動歴>

1979年 今野忠一塾「龍生会」に入る  
第64回院展初入選

1981年 院展院友になる

1994年 今野忠一塾「旅人会」に入る

1990年 山形松坂屋にて個展開催

2006年 第91回院展奨励賞

2007年 「風の道」日本美術院賞 大観賞受賞

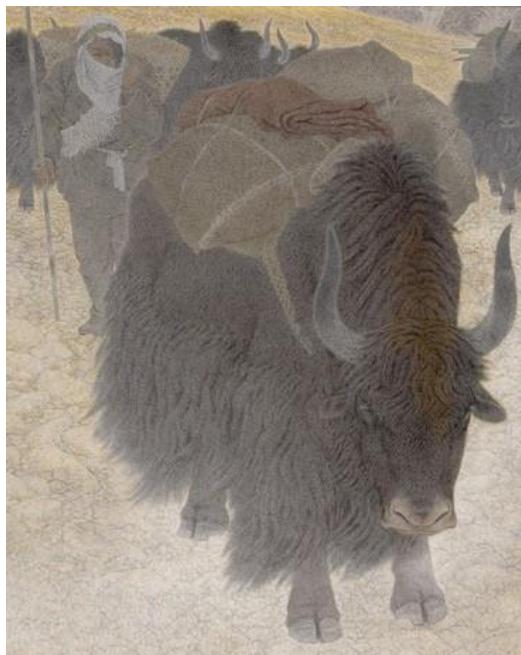
2008年 第93回院展奨励賞

風景や動物を多く描いている日本画家である。彼の描く絵からはその場の空気感や匂いまで漂ってきそうである。現在、院展で活躍をしている番場三雄は、スケッチを基に丁寧に描写された絵を描く作家である。対象と正面から向き合う姿勢を大事にし、「相手と対話する」、自分は対象から「教えてもらっている」ことを意識してスケッチに取り組んでいるという。常に、対象と自分のスケッチを見比べながら「本当にこれでいいのか」という疑問を投げかける。そのやり取りの中でより対象に近づくことができるのだ。  
彼の、対象を柔らかく厳しい目で自らの中に取り込もうとしている作家の姿勢を感じ取ってもらいたい。

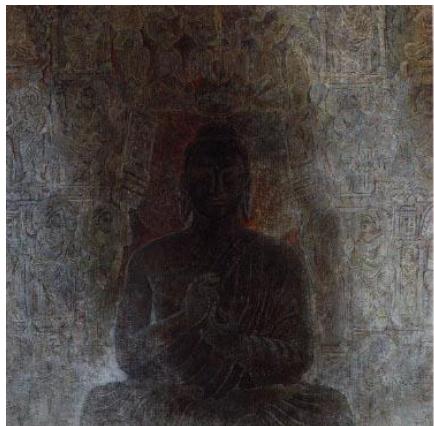
#### <番場三雄の部屋>

部屋の中を覗くと、まず目に入るのは絵を描くために床に拡げられた画材たちである。

絵の具の入った瓶、さまざまな種類の筆、膠を溶かすためのコンロ、絵のための資料がある。その横には自身の描いたスケッチが並べられてある。どのスケッチも細部まで緻密に描かれ、見ごたえのあるものばかりだ。



《越えて》  
岩絵具、紙  
225×180cm



《ガンダーラ想》  
1992  
1面 紙本着色  
102.0×102.0 cm



《風の道》  
2007

